

夏目漱石

正岡子規

正岡子規

正岡まさおかの食意地くいいいじの張った話か。ハ、ハ、ハ。そうだなあ。
なんでも僕が松山にいた時分、子規しきは支那しなから帰って来て僕のところへ遣やって来た。自分のうちへ行くのかと思つたら、自分のうちへも行かず親族のうちへも行かず、ここにいるのだという。僕が承知もしないうちに、当人ひとり一人で極きめている。御承知のとおり僕は上野の裏座敷を借りていたので、二階と下、合あせて四間あつた。上野の人がしきりに止める。正岡さんは肺病だそうだから伝染

するといけないおよしなさいとしきりにいう。僕も多少
気味が悪かった。けれども断ことわらんでもいゝと、かまわ
ずに置く。僕は二階にいる、大将は下にいる。そのうち
松山じゅう中の俳句を遣る門下生が集まって来る。僕が学校
から帰ってみると、毎日のように多勢来ている。僕は本
を読むこともどうすることもできん。もつとも当時はあ
まり本を読むほうでもなかつたが、とにかく自分の時間
というものが無いのだから、止やむを得ず俳句を作った。
それから大将は昼になると蒲かば焼やきを取り寄せて、御承知の
とおりぴちやくと音をさせて食う。それも相談もなく

自分でかってに命じてかってに食う。まだ他の御馳走も
取寄せて食ったようであつたが、僕は蒲焼の事をいちば
んよく覚えてる。それから東京へ帰る時分に、君払つ
てくれたまえといつて澄まして帰つて行つた。僕もこれ
には驚いた。そのうえまだ金を貸せという。なんでも十
円かそこら持つて行つたと覚えてる。それから帰りに
奈良へ寄つてそこから手紙をよこして、恩借の金子は当
地においてまさに遣い果し候とかなんとか書いていた。
おそらく一晩で遣つてしまったものであろう。

しかしそのまえは始終僕のほうが御馳走になつたもの

だ。そのうち覚えていゝる事を一つ二つ話そうか。正岡と
いゝ男はいつこゝう学校へ出なかつた男だ。それからノ
トを借りて写すよゝうな手数をすゝる男でもなかつた。そこ
で試験前になると僕に来てくれといゝう。僕が行つてノ
トを大略話してやる。彼奴きやつの事だからえゝ加減かげんに聞い
て、ろくに分わかつていゝないくせに、よしく分わかつたなどとい
つて生吞込なまのみこみにしてしまゝう。その時分は常盤会とぎわかい寄宿舎にいた
ものだから、時刻になると食堂で飯を食う。ある時また
来てくれといゝう。僕がその時返辞をして、行つてもえゝ
けれどまた鮭さけで飯を食わせるから厭いやだといゝつた。その時

は大おおに御馳走をした。鮭さけを止やめて近きん処じよの西洋料理屋やかなにかへ連れて行いった。

ある日突然手紙をよこし、大宮おおみやの公園の中の万松庵まんそうあんにいるからすぐ来いという。行いった。ところがなかなか綺麗きれいなうちで、大将奥座敷うすくらに陣取じんとって威張いばっている。そうしてそこで鶉うすくらかなにかの焼いたのなどを食たわせた。僕はその形勢けいせいを見て、正岡は金がある男おとこと思おもっていた。ところが実際はそうではなかつた。身代みしろを皆食たいつぶしていったのだ。その後熊本くまもとにいる時分ときぶん、東京へ出て来た時、神田川かんだがわへ瓢亭ひょうていと三人で行いったこともあつた。これはまだ

正岡の足の立っていた時分だ。

正岡の食意地の張った話というのは、もうこれくらいほか思い出せぬ。あの駒込追分奥井の邸内におった時分は、一軒別棟の家を借りていたので、下宿から飯を取寄せて食っていた。あの時分は『月の都』という小説を書いていて、大に得意で見せる。その時分は冬だった。大将雪隠へはいるのに火鉢を持ってはいる。雪隠へ火鉢を持って行ったとて当ることが出来ないじやないかというど、いや当り前にするときん隠しが邪魔になっ
ていかぬから、後ろ向きになって前に火鉢を置いて当るのじやと

いう。それでその火鉢で牛肉をじやあく煮て食うのだからたまらない。それからその『月の都』を露伴ろはんに見せたら、眉山びざん、漣さざなみの比でないと露伴もいったとか言って、自分も非常にえらいもののようにいうものだから、その時分わかなにも分らなかつた僕も、えらいもののように思っていた。あの時分から正岡にはいつもごまかされていた。発句ほっくも近来ようやく悟ったとかいって、もう恐ろしいものはないように言っていた。相変わらず僕はなにも分らないのだから、小説同様えらいのだらうと思っていた。それからしきりに僕に発句を作れと強しいる。その家の向うむい

に笹藪ささやぶがある。あれを句にするのだ、えゝかとかなんと
かいう。こちらはなんともいわぬに、向うで極まめている。
まあ子分のように人を扱うのだなあ。

また正岡はそれよりまえ漢詩を遣っていた。それから
一六風いちろふうくふうかなにかの書体を書いていた。そのころ僕も詩や
漢文を遣っていたので、大おおいに彼の一粲いっさんを博した。僕が
彼に知られたのはこれが初めであった。ある時僕が房州ぼうしゅう
に行った時の紀行文を漢文で書いてそのなかに下くだらない
詩などを入れておいた、それを見せたことがある。とこ
ろが大將頼みもしないのに跋はくを書いてよこした。何でも

そのなかに、英書を読む者は漢籍ができず、漢籍のできるものは英書は読めん、わが兄けいのごときは千万人ちゆう中の一人ひとりなりとかなんとか書いておった。ところがその大将の漢文たるやはなはだまずいもので、新聞の論説の仮名かを抜いたようなものであつた。けれども詩になると彼は僕よりもたくさん作っており平仄ひようそくもたくさん知つていゝる。僕のは整わんが、彼のは整つていゝる。漢文は僕のほうに自信があつたが、詩は彼のほううまが旨うまかつた。もつとも今から見たらまずい詩ではあるうが、まずその時分の程度で纏まとつたものを作つておつたらしい。たしか内藤ないとう

さんといっしょに始終やっていたかと聞いている。

彼は僕などより早熟で、いやに哲学などを振り回すものだから、僕などは恐れを為^なしていた。僕はそういうほうに少しも発達せず、まるでわからんところへ持って来て、彼はハルトマンの哲学書かなにかを持ち込み、だいぶ振り回していた。もつとも厚いドイツ書^{しよ}で、外国にいる加藤恒忠氏に送ってもらったもので、ろくに読めもせぬものをしきりにひっくりかえしていた。幼稚な正岡がそれを振り回すのに恐れを為^なしていたほど、こちらはいよく幼稚なものであった。

妙に気位きぐらいの高かった男で、僕などもいつしよにやはり気位の高い仲間であった。ところが今から考えると、両方ともそれほどえらいものでもなかった。といていたずらに吹き飛ばすわけではなかった。当人は事実をいつているので、事実えらいと思っていたのだ。教員などは滅茶苦茶であった。同級生なども滅茶苦茶であった。

非常に好き嫌きらいのあった人で、めったに人と交際などはしなかった。僕だけどういものか交際した。一つは僕のほうがえゝ加減に合わしておったので、それも苦痛なら止やめたのだが、苦痛でもなかったから、まあできて

いた。こちらがむやみに自分を立てようとしたらとても円滑な交際のできる男ではなかった。たとえば発句などを作れという。それを頭からけなしちやいかない。けなしつつ作ればよいのだ。策略でするわけでもないのだが、しぜんとそうなるのであった。つまり僕のほうが人が善よかったのだな。今正岡が元気でいたら、よほど二人の關係は違うだろうと思う。もつともその他、半分は性質が似たところもあったし、また半分は趣味の合っていたところもあったろう。も一つは向むこうの我とこちらの我とが無茶苦茶に衝突もしなかつたのでもあろう。忘れていた

が、彼と僕と交際しはじめたも一つの原因は、二人で寄席よせの話をした時、先生も大いに寄席通よせつうをもつて任じている。ところが僕も寄席の事を知っていたので、話すに足るとでも思ったのであろう。それから大いに近よつて来た。

彼は僕にはたいていな事は話したようだ。（其例一二省く）とにかく正岡は僕と同じ歳としなんだが僕は正岡ほど熟さなかつた。ある部分は万事が弟扱いだつた。したがつて僕の相手し得ない人の悪い事を平気で遣やつていた。すれっからしであつた。（悪い意味でいうのでは無い。）

また彼には政治家的のアムビションがあつた。それで

しきりに演説などをもやった。あえて謹聴するに足るほどの能弁でもないのに、よくのさばり出て遣った。つまらないから僕等ら聞いてもいないが、先生得意になつてやる。

なんでも大将にならなけりや承知しない男であつた。二人で道を歩いていても、きつと自分の思うとおりに僕をひっぱり回したものだ。もつとも僕がぐうたらであつて、こちらへ行こうと彼がいうとそのとおりにしておつたためであつたらう。

一時正岡が易を立ててやるといつて、これも頼みもし

ないのに占つてくれた。畳一畳くらいの長さの巻紙になにか書いて来た。なんでも僕は教育家になつてどうとかするというのが書いてあつて、ほかに女の事もなにか書いてあつた。これは冷か^{ひや}しであつた。いったい正岡はむやみに手紙をよこした男で、それに対する分量は、こちらからも遣つた。今は残っていないが、どれも愚なものであつたに相違ない。

(明治四一・九・一「ホトトギス」)

日本文学電子図書館

正岡子規

著 者 夏目漱石

制作者 宮澤一郎

底 本 「漱石全集 第 1 卷」角川書店
昭和42年10月10日 8版発行

日本文学電子図書館